

「但馬むしの会」10年の歩み

高橋 国

この会が発足したのは1976年（昭和51年）8月で、翌年4月に会誌IRATSUME創刊号が発行されている。そのなかに谷角・遠藤両君が「会の成立の経緯と展望」について書いているし、木下さんや足立・石田君もそれぞれの立場で書いている。それを読めば会の創立当時のことがまとめられると安易な気持で原稿を引受けたが、いくら読み返しても筋道をたててまとめることは困難であることが分かったので、極めて不正確で乏しい記憶を頼りに何とか責任を果したいと思う。

1973～74年（昭和48～49年）頃といえば、今「むしの会」の中心的役割を果している豊岡高校生物部OBの諸君が卒業して大学に進学したばかりか、その直前かの頃である。彼らは昭和47年の豊高大火によって焼失した生物部の標本の復元をめざして、活発な採集活動を行い、部活動は活気に満ちていた。また、但馬の各地で観光開発や幹線林道の建設等による環境破壊の問題が論議され、若い情熱を燃やして自然保護協会の活動に加わる者もあった。彼らの情熱を受けとめ、親身になって面倒をみてくださったのは、豊岡小学校の先生であり、野鳥の会のリーダーで、兵庫県自然保護協会但馬支部の事務局を担当されていた松本茂先生である。その頃、先生のお世話で発表された研究紀要の表題を示すと、

遠藤知二・谷角素彦・中野真：豊岡市周辺の蝶 （研究紀要 VOL. I - 1）

本庄四郎：但馬産真正クモ類分布資料

1. 扇ノ山の真正クモ類相について

2. 竹野町の真正クモ類相について （研究紀要 VOL. I - 2）

本庄四郎：但馬産真正クモ類分布資料

1. 氷ノ山の真正クモ類相について

2. 扇ノ山の真正クモ類相について （研究紀要 VOL. II - 1）

石田達也：但馬のスミレ

（研究紀要 VOL. II - 2）

遠藤知二：妙見・蘇武・三川および神鍋周辺の蝶類 （研究紀要 VOL. II - 3）

などで、VOL. I は1975年、VOL. II は1976年に、いずれも事務局の「松本」方から発行されている。

このような雰囲気のなかで遠藤・谷角・石田・足立等の諸君が「むしの会」の設立を思ひたったものと思われるが、そこらの事情はよくわからない。ただ何回か喫茶店「ベル」に呼び出されて、自然保護協会の松本先生や木下さん、早川さんとともに彼らの熱弁を聞かされたことを覚えている。我々「おとな」は若者達の理想や情熱は嬉しいとしても、経費の問題とか会の運営について、どこまでやれるのか自信がもてないこともあって、慎重に、慎重にとブレーキをかける役目を果さざるを得なかった。結局、当面は自然保護協会の援助のもとに会を発展させることになり、その事務局を木下賢司さんにお世話をいただくことになったのである。この木下さんの献身的なお世話があったからこそ、「おとな」の心配を見事に裏切って10年の歩みを重ね、今日の「むしの会」の発展があったのだとか感謝している。木下さんの自然保護協会例会案内のきめ細かい配慮にはいつも感心させられるが、そのうえに「但馬むしの会ニュース」とか、諸案内から会計まで、すべてにわたって快くお世話くださる姿には頭が下がるばかりである。

もちろん谷角・足立両君の功績を忘れているわけではない。会の原動力は両君にある。会誌IRATSUMEが全国的スケールで資料として注目されるようになったのも、また、いち早く虫界の動向を知り得るのも、谷角君が保育社というまたない職場を得ているからである。但馬から遠く離れた地にあって、多忙な仕事の合間にみつけて会のために努力を惜しまない両君があって、この会が生き続いているといつても過言ではない。

「むしの会」はこの10年、決して楽な道を歩んできた訳ではない。同好会にはありがちなことはいいながら、慢性的な赤字に悩みながら、会誌も休まず発行を続けてきた。会員数も50名を数えるようになった。研究の内容もウスバシロチヨウやムカシトンボの生態研究をはじめ、地方色豊かでユニークなものが見られるようになった。今や「むしの会」は幼児期を脱して青年期に達したと考えても早計のそしりは受けまい。

ただ心配なのは、後継者の問題である。創立以来の諸君がいつまでも犠牲的精神で会の運営にあたることは許されまい。誰かが後を継いで会を発展させていかなければならない。ここまで育ってきたこの会を、末永く存続させていくために、この10年を節目として考えるべき時にきていると思う。